

# 南の風 489

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

コーチにとって子どもたちから信頼されるのは大切なことです。しかしそのためにはまずコーチが子どもたちを信頼し、敬意を抱くことが先だと思います。

「自分はコーチだ」という尊大な態度で、短絡的に「威厳があるのは当然だ」と考える人はこの順番が逆になりがちです。もしかすると子どもたちが自分を信頼してくれれば、自分も子どもたちを信頼してあげる、というスタンスなのかもしれません。このような、**相手がしてくれれば返すという見返り型の対応では、選手と良い信頼関係は築けない**のではないのでしょうか。

大切なのは「信頼」を築くときには、まず性善説（人間は元来「善」であるという考え方）に立たなければ成り立たないということです。コーチはどうしても「子どもたちはサボるはずだ。手を抜かないように練習を見張らないといけないという、性悪説に立とうとします。しかしまずは選手に対して無条件で性善説に立つこと。子どもたちはバスケットボールが好きだからやっているのです。好きではなかったら他の習い事や、クラブや部活動を選んでいるはずで、好きなのだから上手くなりたいに違いない。**上手くなりたいのだからコーチがその手助けをする**。この部分だけは絶対的に信頼しないといけません。

そのうえでさらに「彼（あるいは彼女）はやってくれるはずだ」と信頼してそれを伝えること。もしその選手が期待通りのレベルまでできなかったのなら、それはコーチが「ここまではやるはずだ」と一方的に作った基準かもしれません。引き上げてあげられなかったコーチの責任かもしれません。ここは非常に難しい領域だと思います。コーチとしての哲学が反映される側面です。少なくともここで言えることは、指導者が選手に与えたことは帰ってくるという法則（ミラーイメージの法則）があり、不信からは不信が返ってくるということです。

ジョン・ウッデン氏はコーチの在り方について次のように言いました。「真の指導者は、単に権威のある人物というのではなく、それよりもずっと大きな存在である。看守も権威を持っているが、指導者ではない。指導者とは、人々に意欲を起こさせるために銃を必要としない人のことである。

拳銃を突き付けるような、恐怖心や威圧感で選手を動かすのはコーチとは呼べません。選手はコーチへの「尊敬」から、「この人の期待に応えたい」という動機を抱きます。選手からの尊敬を得ることが、偉大なチームづくりへの第一歩になる気がしています。

以前は「飴と鞭」のような指導法も存在していました。しかし現在はこの方法では人のやる気は引き出せないことが分かっています。結局のところ、最終的には**「尊敬」を土台にした関係を築くことがベスト**だということになります。

尊敬は捉えどころのないもので、こうすれば尊敬されるという正解がないものです。

一つの考え方として**尊敬を得る方法は、知識量ではなく人間としての「魅力」だと考えられます**。むしろ技術や理論では差がつきにくいからこそ、指導者の人間性で大きな差がつくとさえいえます。永遠に答えの出ない問いかもしれませんが、「**魅力**」と何か？ 模索し続けることが、コーチには求められているのではないのでしょうか。